

〔書評〕

西村徹著『オーウェルあれこれ』（人文書院）

奥 山 康 治

1

「ソヴィエト・ロシアの体制は、それ自身を民主化するか、あるいは破滅するかのいずれかである」と、『動物農場』『一九八四年』の作者ジョージ・オーウェルは1946年5月に書いた。昭和でいえば21年のことである。このようなことをこの時期に明言した知識人が日本にいただろうか。昭和21年でなくともよい、昭和31年ではどうだろうか。（フルシチョフがスターリン批判をした年。）

オーウェルがこの時期にこのようなみごとな予測をすることができたのはなぜだろうか。彼に自由を求める人間の精神に対する信頼があったからであり、またスターリン体制について、これは人間を強権によって奴隷化している体制である、との確信があったからである。

オーウェルはいわゆる〈正統〉や〈正統的意見〉というものによって異端視された人間だった。彼は「文学を亡ぼすもの」（‘The Prevention of Literature’, 1946）の中ですぎのように書いている。

明快で生き生きした言葉を使って書くためには何物をも恐れずに考えなければならず、何物も恐れずに考えたとしたら、われわれはけっして政治的に正統的ではありえない。

オーウェル自身はこのような人間だったのだが、オーウェルを引用する左翼の人間の中には、自分が属する、あるいは忠誠心をいだく、〈正統〉集団の意見の命ずるままに、あるいはこれを考慮した上での自己規制に基づいて、オーウェルを裁断・断罪するものが多くいた。その中の大物がレイモンド・ウィリアムズとアイザック・ドイッチャーである。

西村徹氏の『オーウェルあれこれ』（人文書院、1993年10月刊）の第一部第二章は、この左翼の大物評論家の一人であるドイッチャーが1954年に発表したオーウェル論「『1984年』— 残忍性神秘主義」（Isaac Deutscher, “1984—The Mysticism of Cruelty”）を論じたものである。ドイッチャーは異端的社会主義者オーウェルが左翼の進歩的運動全体のためにいかに大きな害毒を流したかについて力説しているのだが、西村氏はこのドイッチャーの論説が一見客観的作品批評のようでありながら、いかに党派的なものであるかを論証している。ドイッチャーが、『一九八四年』は実際には「敵の手に強力な武器を提供してしまった」のであり、「いまこの冷戦という政治状況の中で出版したのはいけないこと」だったと非難したうえで、「『一九八四年』はスターリン主義のみならず、あらゆる形態、色合いの社会主義に対する暗たんなる幻滅の記録である」と結論づけていることに対して、西村氏はこの論説がいかに教条主義的、スターリン的なものであるかを細密に例証している。氏はその論をつぎのような文でしめくくっている。

スターリンに追われたドイッチャーは、スターリンの座にマルクスを置きかえて、その名において相変わらずスターリンに対する忠実なしもべでありつづける。オーウェルと共に「不誠実と憶病は、かならず報いを受けることをしかと忘れるな。何年も続けてソビエト政権なり他の政権なりにへつらう宣伝屋のまねをして、それから突然まっとうな精神に戻れるなどと思うな。いったん淫売になったら永久に淫売なのだ」と言っておこう。『『スターリンはつねにただしい』が基盤では、真の同盟などまったくありえない。真の同盟にいたる第一歩は幻想を捨て去ること」だからだ。それ

にしても、このちよろちよろとオーウェルを拾い読みしてでっちあげた一夜漬けの小手先芸を、仮にも文学研究が専門の連中が、こんなに大仰にもちあげるのはどういうことなのであろうか。やはりオーウェルが告発してやまなかった知識人の権威に跪く習性によるものであろうか。マルクスだのなんだのをかついでかさにかかるドイッチャーの態度そのものがオーウェルにはがまんならなかったもののはず。そこがわからなくて、オーウェルを批評するものにもあったものではなからう。

日本の「文学研究が専門の連中」の中の、オーウェル研究の草分けと自負している人達の中に、オーウェルのことについて「状況によって言ってよいこととよくないことがある」というようなことを公開討論会の場で言った人がいることを私は忘れることができない。このような人に西村氏のドイッチャー論をぜひ読んでもらいたいと思う。

ここで私はつらつら思う——西村氏のように「何物も恐れずに考える」自由な精神を保ち、齒に衣着せぬ発言をすることができるのは、氏が親分子分兄貴分弟分の義理と人情のしがらみで動きのとれなくなっている東都の英文学界から離れた浪速に住みつづけておられるからだろうか、それとも氏が心の中に、浮世の浮沈を超越した太い支えのようなものをもっておられるからだろうか、と。

『オーウェルあれこれ』の第三章「『1985年』は『一九八四年』を越えたか？」は「A. バージェスのG. オーウェル批判の批判」の副題が示すとおり『時計仕掛けのオレンジ』の作者アントニー・バージェスが書いたオーウェルの『一九八四年』のパロディと批判を批判したものである。

西村氏によれば、バージェスのオーウェル批判の眼目は三つである。(1)『一九八四年』は徹頭徹尾喜劇だということ、(2)オーウェルは労働者を敵視しているということ、(3)オーウェルが槍玉にあげているのは全体主義の未来像などではなくて、1945年に成立した労働党政権下のイギリスだということ、

である。

西村氏はイギリスの右派を代表するようなこの論客の議論についても、一つ一つ例をあげながら論破し、オーウェルが『一九八四年』の前後に書いた評論やエッセイや書簡などを援用しながら、「地球の全体が巨大な収容所と化した未来図を描き出すことによって鋭く警告を発しようとした『一九八四年』の基本構想は……かなり明瞭に読みとれるはずである」とのべたあとバージェスの論について、「支離滅裂というのか分裂症的というのか……ともかく呆れるほかない。自分自身のおかしている論理矛盾にはほとんど不感症といたくなるほど無節操で、その時その時のでき心を書いて数ページも過ぎればケロリと忘れてしまうらしい」と手きびしい批判をしている。

第四章「オーウェルとサルトル——反ユダヤ主義をめぐる」は、反ユダヤ主義を論じたサルトルの本についてのオーウェルの書評をとりあげ、一時期左翼陣営の偶像であったサルトルのものの考えかたの基本にある硬直した二分法に対し、オーウェルの基本的態度である個と日常性を重視するものの考えかたを対比させた論文である。サルトルが反ユダヤ主義者に定冠詞をつけ、いわば犯罪者の集団として、類型として論じていることについてのオーウェルの指摘を紹介したあと、西村氏は書いている。

たしかに、サルトルを読んで強く印象づけられるのはその昂ぶりである。昂ぶりによって肥大する観念の生々しさである。ここに登場する反ユダヤ主義者というのは、現実の世界に個人としての顔を持った、具体的に生活を営むさまざまな人間であるよりも、反ユダヤ主義という観念が、まさにア・プリオリに存在していて、普遍的で恒常的なその観念が擬人化された、まるでアレゴリー劇の登場人物のように日常性を欠いた、一種のグロテスクな顔を持って立ち現れてくることである。そして現実の生身の人間は、もしいささかでもユダヤ人に好意的でないところがありさえすれば、その程度にはおかまいなく、すべて一挙に、サルトルによって完成された定冠

詞つき反ユダヤ主義者の像のうちに収斂される。

そしてこのあと、オーウェルの態度が紹介される。

オーウェルの処方とは逆になる。自分のアリバイをつくるために他人の罪を言い立てるのではなく、「いくらでも信頼するに足りる証拠をとらえうる唯一の場所、すなわち自分自身の心の中を調べることから始める」べきだという。……「いちばんよいのは反ユダヤ主義をあばきたてるのではなく、自他を問わず心中にみとめられる反ユダヤ主義支持の立脚点をことごとく洗い直すことから始めることだ」という。

正統左翼サルトルと異端者オーウェルとの基本的な違いを、西村氏はこのようにして浮きぼりにして示している。

2

『オーウェルあれこれ』の第二部は、平凡社から1970～71年に出版された『オーウェル著作集』（4巻）の翻訳点検である。

この著作集4巻本はオーウェルのエッセイ、ジャーナリズム、書簡で1968年までにその存在が知られていたものを未亡人ソニアとロンドン大学〈オーウェル・アーカイヴ〉の管理者イアン・アンガスが編集した4巻本の翻訳で、オーウェルの全体像を知るうえで欠かすことのできない重要文献である。日本では初版が出ただけで絶版になっていて、古本市では10万円に近い値がついているともいわれている。

この4巻本『著作集』は共訳である。共訳者の数は第1巻が8人、第2巻8人、第3巻7人、第4巻9人である。訳者の中には鶴見俊輔氏、小野協一氏、小池滋氏といった英語の達人もはいつているが、中にはオーウェルの文章を翻訳するのははじめての人や、錆びた長刀でオーウェルの文章をぶった

切っているような感じの人や、寝呆けまなこで横文字を縦になおしているような人もいる。各巻に一人の責任者がいるが、翻訳分担者の翻訳最終原稿をチェックする、ということはおこなわれてはいないようである。共訳者がそれぞれの分担についての責任をとる、ということで、良くいえば個性的だが、悪くいえば無責任体制による翻訳である。(これについて第2巻の「訳者代表」の小野協一氏にきいたことがある。氏の答えは「他の訳者の翻訳に手をいれたりなど、いっさいしなかった。誤訳については当人に恥をかいてもらうのが私の主義だ」というものだった。)

街中で欠陥商品を売り、あとは知らぬ顔をしていると消費者から糾弾される。翻訳書だけが例外であってよいはずはない。『オーウェルあれこれ』の第二部で翻訳点検をやられた西村氏の義侠心と、そして勇気をたたえなければならぬ。(これはたいへん勇気のいる仕事である。誤訳を指摘された人は、だいたいにおいて感謝するどころか、「あらさがしをされた」と感じて逆うらみをするからである。)

この第二部でかなりひどいものとして誤訳が指摘されているオーウェルの著作はつぎのものである。「芸術とプロパガンダの境界」「文学と全体主義」「ウェルズ、ヒトラー、および世界国家」「ドナルド・マックギルの芸術」「まさに、たれひとりいない」「平和主義と戦争」「文学と左翼」「戦争犯罪人はだれか」「詩とマイクロフォン」「戦争日記」「書評——サルトル著『反ユダヤ主義者の肖像』」「書評——オーケイシー著『窓辺に響く太鼓』」「キップリングの死について」「スペイン民兵についてのノート」「書評——J. コモン著『街の自由』」「書評——ジェリネック著『スペインの内戦』」「黒人は抜かして」「少年週刊誌」。オーウェルが書いた重要な評論、エッセイ、書評が多く含まれている。指摘を受けた訳者と出版社には、これらの誤訳をできるだけ早い機会に訂正して読者に届ける義務があると私は思う。

最後に僭越ながら、『オーウェルあれこれ』の16ページにある『一九八四年』についてのジュリアン・シモンズの書評からの引用について、私はつぎのように訳してみました。

なによりも第一に登場人物の感情的関係に興味を持つ小説家と、登場人物には主として人生と社会に関する観念を伝える手段として興味があるとする小説家と、二通りを便宜的に区別することは可能である。ところで、内的シンボリズムでなく外的分析によって現実に接近する作家に対しては重おもしく首を横に振るのがこの約半世紀にわたっての流行となっている。そのような作家には小説家の呼称さえまったく許さるべきではないとさえ言われてきた。だが、小説は大脳的であるよりも内臓的であるべきだというのは現代特有の一つの慣習的見解であるにすぎない。外観の堅固な色彩を通じて現実に接近する小説(また一般に観念小説でもある)は、れっきとした系譜を、そして判然たる、また卓越した、現代における代表群を有しているのである。そしてそのもっとも注目すべき人びとの中にジョージ・オーウェル氏は数えられる。